



Data

監督・脚本：三澤拓哉
 プロデューサー：ウォン・フェイスン
 出演：守屋光治／中崎敏／森優作／永嶋柊吾／堀夏子／小篠恵奈／ロー・ジャンイップ／成嶋瞳子／大河原恵／平田真人／八戸邦子／磯井幸毅／中川香果／清水形／松詠人／本田由椰／桐山雄気／朝倉優士／宮岡亜実／福地冷緒／三澤啓吾

👁️👁️ みどころ

ヨーロッパの巨匠たちの作品は“説明不足”で“クソ難しい”ものが多いが、それはなぜ？まだ20歳代の三澤拓哉監督の本作も、いかにも意味シなタイトルを含めて説明不足気味だが、その出来栄は？

中国でも韓国でも30歳前後の若手監督の躍進が目立っているが、それらに対抗できる数少ない日本の若き才能に注目！

文革時代ラストの中国に登場した「四人組」は悲惨な末路を辿ったが、湘南を舞台にした“高卒4人組”の青春群像劇の展開と結末は如何に？ちなみに、本作のタイトルの意味については、本作ラストに見る『戦艦ポチョムキン』(25年)で有名な“モンタージュ理論”の応用に注目！

■中国、韓国に負けるな！日本にも20歳代の注目監督が■

中国の胡波（フー・ポー）監督、顧晓刚（グー・シャオガン）監督、毕赣（ビー・ガン）監督らは、いずれも1989年前後に生まれた才能豊かな若き男たち。また、韓国のキム・チョヒ監督、キム・ドヨン監督、ユン・ダンビ監督らも、同じく1989年前後に生まれた才能豊かなアラサー女子たちだ。このように、中国、韓国の映画界では才能のある若手監督が次々と登場しているが、日本の映画界における若き才能の登場は？

それはかなり心もとないが、そんな状況下でも『3泊4日、5時の鐘』（14年）で長編映画監督デビューした1987年生まれの三澤拓哉監督は、私の最大の注目株だ。同作は、1980年生まれの深田晃司監督と女優兼映画監督である杉野希妃が三澤拓哉の若き才能を見出したことによって完成した作品で、北京国際映画祭注目未来部門最優秀脚本賞を受賞した。湘南の茅ヶ崎館を舞台にした男女7人の青春群像劇たる同作は、女同士のバトルや若い男女の恋模様他、教授とゼミ生との「不適切な関係」など、杉野希妃の人間観察

眼の鋭さとアイロニーがいつぱいの、メチャ面白い作品だった（『シネマ 37』144 頁）。

これは三澤拓哉監督の生まれが湘南の茅ヶ崎であるためだが、それは本作も同じ。もっとも、桑田佳祐や加山雄三の地元としても有名な湘南や茅ヶ崎は、陽気で明るい海辺の町のはずだが、パンフレットにある映画評論家・轟夕起夫のレビュー、「風の中にたゆたう『答え』」で「三澤拓哉監督の〈湘南シリーズ第2弾〉と呼んでもいいかもしれない。」と書かれている本作の舞台、湘南はかなり陰湿だ。それは、『ある殺人、落葉のころに』という意味シンのタイトルからも容易に想像できる。

さあ、2020年の大阪アジア映画祭で、「JAPAN CUTS Award」を受賞した本作は、一体どんな映画？興味津々だ。

■□■小さな映画でも、韓国・香港そしてアジア映画祭で！■□■

映画は作るのも大変だが、上映し、収益を上げるのはそれ以上に大変。そのため、監督と共にプロデューサーが大きな役割を担うことになる。三澤監督の第1作たる『3泊4日、5時の鐘』は女優である杉野希妃がプロデューサーを務めたが、本作では香港版『十年』（15年）を監督したウォン・フェイパンがプロデューサーを務めている。

同作は、日本・タイ・台湾の共同プロジェクトとして、それぞれの国の「10年後」を描く、①『十年』（香港版）、②『十年』（タイ版）（17年）、③『十年』（日本版）（18年）（『シネマ 43』312頁）の元になったヒット作だから、三澤監督がそんなウォン・フェイパンとタッグを組んだことの意義は大きい。その事によって、本作は“日本映画の枠を超えた新しいアジア映画”に高められたわけだ。それを受けて、本作は、①2019年10月に釜山国際映画祭、②2019年11月に香港アジア映画祭、③2020年3月に大阪アジア映画祭、で上映された後、④2020年10月に茅ヶ崎で先行上映され、⑤2021年2月に大阪のシネヌーヴォで上映されるに至ったわけだ。

私は藤元明緒監督・渡邊一孝プロデューサーがタッグを組んだ第1作『僕の帰る場所』（17年）（『シネマ 41』105頁）、第2作『海辺の彼女たち』（20年）に出資し、その劇場公開の協力を続けている。同作も小さな映画ながら、第30回東京国際映画祭「アジアの未来」部門グランプリを受賞したが、本作も小さな映画ながら、韓国、香港、アジアの上映に至ったことに拍手！

■□■主人公は4人の同級生。卒業後の職場は？力関係は？■□■

『海辺の彼女たち』はベトナムから日本にやってきた3人の技能実習生の女性を主人公とし、青森の寒々とした海辺を舞台とした鋭い社会問題提起作だった。それに対して、本作は暖かい海辺の町・湘南を舞台にした、4人の同級生、俊（守屋光治）、知樹（中崎敏）、和也（森優作）、英太（永嶋終吾）を中心とした青春群像劇だ。幼なじみの“4人組”が同じ地元の高校を卒業し、和也の父親が経営している伊藤土建に4人そろって就職するという設定は、「邦画の枠を超えた新たなアジア映画」という謳い文句とは裏腹の、いかにも今ドキの“内向きニッポン”の表れだ。しかも、高校時代までは何の利害関係もない屈託の

ない友人関係でいられたはずの4人組だが、雇い主が和也の父親で、和也はその後継者ともなると、4人組の力関係には少しずつ変化が・・・。

普通は、和也がそれを自制するものだが、スクリーン上では逆に、和也が、「お前ら誰に雇われているんだ」的な態度をとっているから、アレレ。たしかに、伊藤土建の社長は和也の父親だが、そうだからといって、二代目の和也が同級生だった3人の親友を子扱いしていい、ということにはならないはずだ。具体的には、自動販売機の前で和也が知樹に対して、「俺の前で携帯をいじるな！」と叱責している姿にビックリ。また、この4人は、いつも知樹が寝泊まりしている伊藤土建の倉庫内でトランプゲーム（賭けトランプ）に興じていたが、そこに英太の彼女・沙希（小篠恵奈）がやってくると、そこでも和也は英太に対して「いつも言っているだろ、職場に女を入れるな！」と命令口調で・・・。

4人とも同じ職場で同じように働き、いつも仲良くトランプゲーム（博打）をやっていたが、その後、次々と“あの事件”、“この事件”が起きてくると、4人の力関係は大きく変わっていくことに・・・。『海辺の彼女たち』では、最悪の状況下でもベトナムからやってきた3人の女の子たちの結末は固かったが、さて、同じ湘南に住み、同じ職場で働いている日本人の若者4人組は・・・？

■□■ “あの事件”、“この事件” が4人組をバラバラに！ ■□■

かつて中国では文化大革命を主導し、毛沢東の後継者を狙った、江青、張春橋、姚文元、王洪文の「四人組」が注目されていたが、その末路はバラバラで哀れなものだった。それと同じように、本作でも次々と起こる“あの事件”、“この事件”によって、4人組は次第にバラバラに。三澤監督はそれを今ドキの邦画のように、何でも説明調の演出とは正反対の、チラリチラリと小出しにしながらか演出していくので、それに注目！

第1の事件は、4人組を結びつける原動力になっていた、高校時代の恩師の突然の死亡。4人組を含めた葬儀参列者がビックリしたのは、その喪主が誰も知らなかった未亡人・千里（堀夏子）だったことだ。ええ～、先生はいつ再婚していたの？しかも、そのお相手があんなに若く美しい女性だったとは！先生は、なぜそれを内緒にしていたの？

第2の事件は、伊藤土建の社長（＝和也の父親）の借金の処理のため、和也が仕方なく産業廃棄物の不法投棄に手を染めること。それに同行したのは和樹だけだったが、そんな犯行がもたらす波紋は？

第3の事件は、4人組がいつもの倉庫内で例外的に英太の彼女・沙希を参加させてトランプゲームと酒宴に興じた後のレイプ（未遂）事件の発生。沙希は「和也にやられた！」と英太に訴えたが、それを伝え聞いた和也は「そんなはずないだろう。ぶつかっただけだ」とシャーシャーと答えていたが、さて、真相は？

以上の他にも、本作中盤には、こともあろうに恩師の未亡人である千里と俊がいい仲になった（？）り、和也の母親といがみ合いを続けていた祖母が突然いなくなったうえ、死体で発見されたり、およそ湘南の町には不似合いな、不穏かつ陰湿な事件が発生するので、

それらに注目！これらの事件が4人組をバラバラにしていっただのは明らかだが・・・。

■□■説明不足は不親切？それとも絶妙な演出テクニック？■□■

昔からヨーロッパの名画系映画は説明不足の面が強く、監督がその映画で何をアピールしたいのかわ、**「観客自身が考えてください」と主張するものが多い。**それと正反対なのが日本のTVドラマで、そこではストーリーがわかるようにすべてが説明調になっている。「犯人は誰だ」をテーマにしたミステリー作品でさえ、最後には名探偵がすべての謎を解き明かし、ネタバレをするのが一般的だ。

1年間を通して放送されるNHK大河ドラマならそれでもいいが、2時間弱で編集すべき映画の演出が、ホントにそれでいいの？深田監督らの影響を受けながら、そんな映画の演出法を学んだ三澤監督は、当然ながら自分の映画では説明不足型を選び、観客には自ら考えさせる演出を目指している。もっとも、前作『3泊4日、5時の鐘』は明るい青春群像劇だったから、説明不足もそれなりに楽しいものだった(?)が、『ある殺人、落ち葉のころ』というタイトルに象徴される本作のような実に鬱陶しい展開では、観客は2時間弱ずっとイライラしながらよくわからないストーリーを見続けることになる。もちろん、パンフレットに書かれている「ストーリー」はほんの要旨だけだし、“ネタバレ情報”としてネット上に投稿されている文章には明らかな誤りがあるほどだ。

本作は、冒頭の「私は覚えている」という女性のナレーションから始まるが、これは一体誰が語っているの？そして彼女は一体何を覚えているの？ひょっとして、彼女は前述した第1の事件、第2の事件、第3の事件等の真相を知っているの？いやいや、そんなことはあり得ないはずだ。このような、いかにも思わせぶりでミステリアスな演出が過度になると嫌味になる危険性もあるが、さて、本作は？

■□■“ある殺人”の演出はモンタージュ理論の応用で！■□■

私は2007年にキネマ旬報社の映画検定3級に合格したが、その時『映画検定 公式テキストブック』（キネマ旬報映画総合研究所編）で勉強したのが“モンタージュ理論”。これは元々はフランス語で「(機械の)組み立て」という意味だが、視点の異なる複数のカットを組み合わせて用いる技法という「映画用語」として有名になっている。モンタージュ理論が効果的に使われた例は、ソ連映画『戦艦ポチョムキン』（25年）で、とりわけ乳母車が階段を転がり落ちる場面は“モンタージュ理論”の応用として有名だ。しかして、本作ラストでは、ココ・コーラの瓶が坂道を転がり落ちていくシーンで、『戦艦ポチョムキン』で観たそんな“モンタージュ理論”が登場するので、それに注目！

本作中盤までは他の3人と同じ作業服だった和也が、後半からはスーツ・ネクタイ姿に変身するが、これは彼が伊藤土建の2代目社長に就任したため。そんな和也は今、何かあるたびに知樹と英太に金（小遣い？）を与えていたが、それは一体なぜ？他方、もともと和也とは少し距離があった俊は、千里といひ仲になってくるとさらに和也との距離を広げ、伊藤土建から去っていったが、それは一体なぜ？きっと俊にはそれなりの理由があるのだ

ろうが、和也にはそれがわかっていなかったのでは？すると、そんな2人が偶然出会うと・・・？そんな場合和也は前と同じように俊が頭を下げてあいさつするのが当然だと考えるだろうが、俊の方は・・・？

本作ラストでは、地下道を歩いていた和也が偶然俊とすれ違うシークエンスが登場する。そして、それと相前後してコカ・コーラの瓶が坂道をゴロゴロと転がり落ちていく場面が・・・。これが“モンタージュ理論”の応用だとすれば、それは一体何を意味するの？『ある殺人、落葉のころに』という本作のタイトルに思いを巡らせながら、それくらいはしっかり理解して、本作を鑑賞しなければ・・・。

■□■三澤監督は『日本春歌考』を本作の参考に！？■□■

私が大学に入学した1967年4月当時はフォークソングの全盛時代で、マイク真木がギターを弾き語りで歌った「バラが咲いた」や荒木一郎の「空に星があるように」が大ヒットしていた。映画でも大島渚監督の『日本春歌考』（67年）が大ヒットしていた。そこで歌われていた「一つ出たホイのヨサホイのホイ」から始まる「ヨサホイ節」は、コンパの席になるといつも手拍子で歌われていた「春歌」だ。しかし、パンフレットの中の「Interview」で三澤監督は、「企画書には参考作品として、『マルホランド・ドライブ』（2001、デヴィッド・リンチ）と『日本春歌考』（1967年、大島渚）を挙げてました」、「男子4人の空想する部分や今見るものは何なのかという感覚、あと音楽など、『日本春歌考』は結構意識してました」と語っている。

私はリアルタイムで『日本春歌考』を観ていないが、機会があればぜひ本作と対比しながら、再度鑑賞したいものだ。

2021（令和3）年5月10日記